

5 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 5 月 7 日（日）10：30－11：30 復活節第 5 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「恵みの選び」

■聖 書：ヨハネによる福音書 15 章 12～17 節（新約 p199）

■讃美歌：19 「み栄え告げる歌は」

483 「わが主イエスよ、ひたすら」

先週の礼拝で、ヨハネによる福音書では、「私は何々である」という表現がよく出てくるということをお話ししました。新約聖書が書かれている元の言葉であるギリシャ語では「エゴー エイミ」という表現になるのですが、その言葉には深い意味が込められているという話もしました。そして、本日の聖書箇所ヨハネによる福音書 15 章も、1 節は「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」と書き出されています。このことは、15 章の 1 節から 17 節までの段落の見出しに「イエスはまことのぶどうの木」という見出しがついていることから明らかなように、「エゴー エイミ」という表現で示される主イエスのご臨在がこれらの御言葉の根底にあると読むことができると考えられます。ですから今、この礼拝では私たちもまた、主イエスがこの場に臨んでおられる、という確信のもとに、共に御言葉に聞き讃美を合わせたいと思います。

ところで、主イエスは重ねて 15 章 5 節、6 節で「5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。6 わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。」とお語りになりました。枝である私たちは、ぶどうの木である主イエスにつながっていることによってこそ実を結ぶことができるのであり、主イエスから離れてしまったら実を結ぶことなく枯れてしまうし、そのような枝は切り取られて焼かれてしまうのだ、と語られているのです。このぶどうの木のたとえば、主イエスというぶどうの木に枝である私たちがつながっているという教会の姿を表している、と代々の教会は信じてきました。しかし、枝である私たちそれぞれが主イエスにつながろうと頑張っているというのではなく、幹である主イエスご自身がつながりなさいと招いてくださることにより、生きた枝としてつながって豊かに実を結ぶ者へと変えられていくのです。では、その豊かな実を結ぶとはどのようなことなのでしょう。本日の聖書箇所である 15 章 12 節以下にはそのことが語られています。

12節に「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」とあります。父なる神に愛された主イエスが、ご自分の命を与えるほどに私たちを愛して下さった、その愛を受けた私たちは、その愛に応じて主イエスを愛して生きるのです。そして、主イエスを愛するとは主イエスの掟を守ること、言い換えれば、主イエスのみ心に従うことになるのです。主イエスの掟とは、私たちが互いに愛し合うことであると主イエスは語っておられます。そこでも忘れてならないのは、まず主イエスが私たちを愛して下さったということに私たちが気づくことです。そのような者たちが集うところに、互いに愛し合うという出来事が生じてくるのではないのでしょうか。そのことを具体的に語っているのが13節です。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」とあります。主イエスは、私たちの救いのために、ご自分の命を捨てて下さいました。それが十字架の死です。主イエスは私たちの全ての罪を背負って、私たちの身代わりとなって十字架にかかって死んで下さったのです。それほどに、私たちが徹底的に愛して下さいました。「これ以上に大きな愛はない」という御言葉は、主イエスがそのように生きて私たちに示して下さったことなのです。私たちはそのような愛に生きた人のことを、いくつも見聞きしています。私が教会に通い出した50数年前によく読まれていた三浦綾子さんの書かれた『塩狩峠』の話、あるいは駅のホームから落ちた人を助けようとして轢かれて命を失った韓国からの留学生の話など、感動的な話があります。しかし私たちは、そのような話を見聞きするたびに、素晴らしいと感動はしますが、それと同時に、そのようにして友のために自分の命を捨てることなど自分にはできない、と思うのです。しかし、少しずつでも、そのように生きていこうとするときに、主イエスの愛が私のうちに働いていることを知らされるのではないのでしょうか。

しかし、このことは私たちがそのような実を結ぶために頑張って努力していくことによって起こるわけではありません。それを語っているのが16節です。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」とあります。この御言葉は非常に有名です。多くのキリスト者が、特に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」という御言葉によって、信仰を与えられたと告白しています。私たちが主イエスというぶどうの木を見つけて、この木につながる枝となれば豊かな実を結ぶことができると考えて、自分自身から主イエスにつながったわけではありません。まず、主イエスが私たちを見出して下さって、ご自分の枝として繋いで下さったのです。私たちはそれに全く相応しくない者であったのに、その私たちのために主イエスがご自分の命を捨てて下さって、これ以上ない大きな愛で愛して下さいました。そういうわけで、私たちが主イエスの枝とされたのは、ただひたすら主イエスの恵みによることなのです。それを、「先行の恵み」と呼んでいます。その恵みは、15節にあるように「あなたがたが出かけて行って実を結び、そ

の実が残るようにと」私たち一人一人を新しく生かして下さり、養い育てて下さって、互いに愛し合って生きるという実を結ばせて下さるものなのです。またそこでは、「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられる」ようになると主イエスはお語りになりました。14章から15章にかけて、同じような語りかけが何度か出て来ています。それは、私たちが主イエスを、そして主イエスの父である神を、心から信頼して、神が最も良いものを必ず与えて下さると信じて生きることができるようにと、繰り返し勧められていることでもあります。17節には「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」と、12節と同じ言葉がもう一度繰り返されています。この命令は、私たちを縛るものではなく、自分自身が主イエスによって選ばれて信じる者へと変えられたと私たちが本当に自覚できたときに、私たちを自由な者へと導く道標となっていくものである、と私は信じています。